

群馬の高校野球

— 一九六九〜二〇一八 —

黒澤克利・関口功一編



みやま文庫

それぞれの甲子園

阿久澤 毅

まるで舞台のようだ。銀傘の日陰からグラウンドに目をやると、緑色の芝と内野の土色が美しいコントラストを生み、ピカピカに光って見える。大銀傘にこだまする打球音と観客の歓声がすばらしい音響効果となり、球児一人一人が主役になれる場所……。ここが球児たちの憧れの甲子園だ。

甲子園は今年で「八〇歳」になる。それを称えるセレモニーが厳かに行われている。どこまでも青い空、突き刺すような光のなかで大会歌を聴いたとき、「ああ、甲子園にもどってきたな」という感慨を覚えた。

「甲子園」という三文字に、野球少年は皆胸を躍らせる。私もその一人であった。（一九七四年）作新学院の江川投手の、剛速球と打者がよけるカーブ。（一九七五年）前工VS静岡の緊迫した投手戦。（一九七六年）東海大相模の原・津末・村中選手の華麗なプレー。どれも日本中の野球少年を圧倒すると同時に魅了した。私も「いつか、ああなりてゝなく」などと思っていた。

いつしか私も高校生になったが、甲子園をより現実的な場所として捉えるには、まだ時間を要した。一年夏、秋、二年夏、……と甲子園への道を閉ざされるたびに、その距離を感じた。「甲子園に行く方法は勝つ以外にはない」。誰もが知っている答えに向い、練習を決心した。運良く最終学年となる春の選抜大会に出場でき（一九七八年）、夏には接戦の末「甲子園」を決めた。

（決勝 桐生8―6前工）

選抜四強の私たちは、データの優勝候補……私達が考えていなかった報道に呆れた。

一回戦は滋賀県代表膳所高校、18―0の大勝。二回戦は名門県岐阜商……

その日の甲子園は「お盆休み」「夏空」「好カード」が重なり、五万五千の観衆を呑み込んでいた。天理・横浜・箕島・PL・県岐商……そして桐生。第二試合には、グラウンドは砂漠のように乾ききっていた。正午にはゲームを中断し終戦記念日の黙祷をした。まさに「夏の甲子園」を象徴するような一日だった。そして、私たちの「甲子園」も終わりを告げた。試合後の選手に対する取材の中で、私はこう言ったのを覚えている。「甲子園が、このままいつまでも続いて欲しいと思います」と……。

あれから三十年近くの月日が過ぎ、今日に至った。教師となって、再びこの地を訪れる機会を得た。「高校生にとってあるいは社会にとって『甲子園』とはどんな役割をはたしているのだから

うか」球場全体を見渡しながら、そう考えた。

高校生に対してはどうだろうか。それは「甲子園で野球をしたい！」という夢を持たせるということに尽きるのではないか。甲子園の持つ八十年の歴史は、野球少年たちの心に強く働きかける。私自身にもそうだった。物心がつき野球というスポーツに触れた時から、夢を実現させるための努力を積み重ねていく。その中で、自主性・工夫・忍耐……など様々な力を身につけていく。現代社会ではおろそかになりがちな身体能力の強化や人間関係を学ぶにはもってこいだ。野球という競技の良さを広め、ひいては各種のスポーツを普及させた功績は大きい。

社会に対してはどうか。甲子園大会は、日本におけるスポーツ大会の運営の規範となる様式を創り上げた。各地区毎に予選会を行い、全国大会を開催運営する。開会式では入場行進に始まり、式典の構成、大会歌・大会旗などのシンボルの作成等、ほとんどの競技に現在採用されている運営スタイルの先駆けとなった。また、その精神はスポーツを行うときの姿勢・態度にも及んでいる。機敏な動作の推奨や礼節を重んじるといった、日本におけるスポーツマンシップの原型が見られる。このスタイルは、甲子園大会様式といっても過言ではないと思われる。

しかし、このことが形骸化してしまうと、野球そのものの衰退を招きかねない。練習や試合のあり方に合理性を重んじ、心身に有益なスポーツとなるよう常に変化可能にしておく必要もある。さらに、本大会は「夏」という季節の季語ともなるほど日本人に浸透しており、また「ある

特別な感情」の媒体ともなっている。地方大会に始まり甲子園の決勝戦が終わるまで、出身校・出身県毎に、日本中の人々がそれぞれのチームを応援する。炎天下の中で汗をかきながら球場に足を運ぶ人、マスメディアを通して観戦する人。合わせるほどのくらの人数になるだろうか。甲子園の魅力はここにある。高校生にしかできない必死のプレーが胸を打つ。実力だけで勝敗が決まる明確さにはすがすがしさを感じる。また、応援している人々にも同じ高校時代があった。都会の雑踏の中で、遠く離れた故郷やそこの生活を思い出す。自分と同じ高校の後輩が出場すれば、それだけで親近感がわく。

そして、人は自分自身のこれまでの歴史を確認しながら、野球を観ている。それは国の歴史とも大きく重なる。黙祷をする時、「戦争の時代」と重なり甲子園に出場する夢に参加できなかった若者、夢を果たしたくてもそれができなかった多くの若者がいたことを胸に刻み、今野球ができることの意味を考えさせてくれる場所でもある。

大会歌が聞こえる。甲子園の情景と必死にプレーする高校生の姿が鮮明に浮かぶ素晴らしい曲である。きらきらと輝く太陽、真つ青な空に白球が打ち上げられる。球場にいる全員の眼がたった一つのボールに注がれ、それは沸きたつ白い雲に溶けてゆく。頂点に達したボールが地上に落ちてきたら、歓声や悲鳴が嵐のように渦巻く。勝った喜びで泣く人、負けた悔しさで泣く人。歌

詞の通り、皆自分の力を出し切ることのできる、甲子園はすばらしい所だ。

だが、大会が終わり球場を去って行つた球児たち（地方大会一回戦敗退チームも含めて）は、その後どのような人生を歩むのだろうか。野球を続けるか否かを含めて、球児たちは一人一人それぞれの道を進んでゆくだろう。人生の道は決して平坦ではない。長い人生の過程では、自分の計画通りにならないことや、思わぬアクシデントに見舞われることが誰にでも考えられる。身の回りの出来事の悩みや心配事も少なからず出てくるものだ。大人になつた球児たちにもひよつとすると、胸が押しつぶされそうになり歩みを止めたくなる時がやってくるかもしれない。

苦しいとき、彼らは一人で空を見上げるだろう。その時、きつと白球を追つて見た青い空を思い出すに違いない。そして仲間と一緒に練習したこと、野球を通じて味わつた喜びや挫折も一緒に蘇ってくるに違いない。高校生だつた日々は暖かい思い出とともに彼らに自信を蘇らせ、倒れそうになつた自分に一筋の希望と立ち上がる勇氣を与えてくれるだろう。困難にうちひしがれて止まりそうになつた足を再び踏み出す君にこそ、人生の栄冠は輝く。

甲子園が存在する理由はここにある。